

広汎性発達障害児の音声による社会的認知

三浦優生（金沢大学 子どものこころの発達研究センター 特任助教）

本研究では、PDDの診断を持つ児童における、音声言語の受容と表出の特徴を明らかにすることを目的とした。とくにここでは音声のプロソディーの機能に焦点を当て、話し手の声色やニュアンスにより伝達されるメッセージの理解と表出の能力を検証した。具体的には、(1)眼球運動追跡法による音声に基づく対象への注視反応の検証、(2)半構造化された場面に抽出された表出プロソディーの分析を行い、よりきめ細やかな視点から、障害特性の解明を目指すものとした。

(1)プロソディー理解の検証

本課題では、PDDの診断を持つ児童の感情プロソディーの理解を、(1)顔とのマッチングおよび(2)指示対象の特定という二つの場面を設定し、また理解の指標として(1)対象画像への視線の定位反応と、(2)その後の指さしによる選択を記録しその結果を比較した。6歳から9歳のPDD児童および定型発達児に対し、二種類の課題を実施した。モノ課題では、壊れたり傷んだりした状態/完全な状態にあるモノの画像の組を、顔課題では、肯定的/否定的な感情を表出した顔画像の組を準備した。また、音声刺激として、肯定的、否定的、中立的な感情価を伴う意味の文を（例：よかった、やだなあ、これ見て）、肯定的、否定的、中立的な感情のいずれかのプロソディーで発話し呈示した（計9パターン）。画面に画像の組が左右に呈示された後に音声刺激が再生された。モノ課題では、参加者は声を聞いて発話の指示対象を特定するように、顔課題では、声を聞いてその声の主を特定するように求められた。音声刺激呈示後の各画像への注視時間、および画像の選択を記録・分析した。



その結果、音声を聞いた直後の注視反応においては、両群ともに、モノ・顔どちらを呈示された場合でも、プロソディーにかかわらず文意味の示す感情に従って顔やモノを注視する傾向が得られた。ただし、文意味が中立的な場合は、定型発達群はプロソディーに込められた感情価を頼りに画像を特定していることが示された。選択回答においては、PDD群においても、プロソディーを手がかりに話し手の顔表情を特定することが示されたが、指示対象の特定場面においてはそのような傾向はみられなかった。自己-他者-モノという三項関係を基礎とする理解は、より困難である可能性が考えられる。

(2)プロソディー表出の検証

本課題では、半構造化された場面においてPDD児のプロソディーを導出し分析した。一般事実に関わる知識を問う質問（例：日本で一番高い山はなんですか）を与え、それに対する子どもの回答発話のプロソディーを記録した。またそれに続いて、その回答に対する自己の確信度を五段階評価にて問い、自己の確信度にかかわるメタ認知がプロソディーの表出と対応しているのかどうかを検証した。

分析の結果、PDD児においても定型発達児と同様に、プロソディーの表出が回答の正解・不正解を反映していることが明らかになった。しかしその一方で、プロソディーの表出と確信度のメタ認知に関しては、PDD群と定型発達群とは異なる結果が得られた。定型発達群においては、複数の発話的特徴（イントネーション、遅延、濁し発話）において確信度評価との間に関連が見られた一方、PDD群においては、上昇イントネーションの有無のみが確信度評価と関連していた。つまりメタ認知と声の表出との間には対応が少ないということが示された。このことから、プロソディーを用いて、自分の命題態度を意図的に、戦略的に伝達している、という可能性が低いということになる。以上の結果から、PDD児は、定型発達児と同様に、場面に適切なプロソディーを表出しているが、その意図的使用という側面からは、定型発達児とは異なる傾向が得られ、PDD児の場合は自己の自信の無さを他者に伝達するため意図的に用いるプロソディー種が多様ではないことが示唆された。

これらの結果を教室場面にあてはめて考えると、PDD児の子どもたちは、ことばによる手がかりが乏しいとプロソディーのみからはすぐには他者の命題態度が判断しにくいこと、また指示対象の特定などより間接的理解を求められる場面ではさらに理解に労力を要することが考えられた。また表出面においては、自分の気持ちを上手に相手に伝えるために、話し方を調整したり制御したりすることが難しい可能性がある。PDD児によるこれらの特性を踏まえ、子どもへの関わりにおいては言語内容にて発話者の命題態度をより明確にしたり、プロソディー表現を強調して明示し気付きを促すような工夫を施すことが挙げられる。また関わり手が、場面ごとに児の注意の対象に寄り添い、意図の理解につとめることも重要である。